

6月25日

「在シドニー総領事交流録」 （第6回）

～ シドニー湾（クッタバル号）を巡る思い ～

6月は、1942年5月31日から6月1日にかけて、シドニー湾に潜入した旧日本海軍の特殊潜航艇による豪州海軍「クッタバル」号の攻撃・沈没を巡り、思いを巡らせる機会が2つありましたので、ご紹介させていただきます。

（この事件の詳細については、徳田前総領事がよくまとめているので、[こちら](#)をご参照いただければと思います。）

まず、最初の機会は、6月6日にマンリーのノースヘッドで開催されたグリフィン NSW 州議会議員の呼びかけによる慰霊式典でした。連邦議員や多くの州議会議員、そして地元の高校生が多く参加しました。

主催者及び地元高校生代表による挨拶は、過去の悲劇を忘れることなく、未来への平和を願うという、心のこもったものでした。それに加えて、主賓のビーズリー州総督のご挨拶は新たな発見ももたらしてくれました。同総督は様々な場で挨拶されていますが、出席される式典のテーマとなるイベントの歴史を深く掘り下げられることが多く、今回も私にとっては勉強となるものでした。それは、1942年5月31日の攻撃が、たまたま遭遇した米軍巡洋艦「シカゴ」号を狙ったものではなく（結果的にその攻撃により「クッタバル」号が沈没したのですが）、その2日前の5月29日には日本海軍の水上機による偵察が行われていたという話でした。その水上機は、日本の I-21 号潜水艦の上甲板から29日未明に発進し、シドニー湾上空に侵入し、「シカゴ」号を発見しました。同機は、時にはハーバー・ブリッジを見上げるほどの高度30メートルまで低空飛行し、サーチライトで発見され、米軍機に追跡されながらも、ノースヘッド上を通過して、母艦に戻ろうとしましたが、時化のために着水時に機体がひっくり返ってしまい、機外に放り出された伊藤機長と岩崎航空士が I-21 号の同僚に救出されたというものです。ビーズリー総督は、この偵察飛行は戦略的な考え方と巧みな技術によるもので、こうした戦略思考と技術は現在両国のよき将来のために活用されているとした上で、この2名も含めた、シドニー湾攻撃に関わったすべての関係者の勇気を、敵味方を隔てることなく讃えておられたことが、私には非常に印象に残りました。

主催者のグリフィン議員及びビーズリー総督からは、私が献花のために出席していることにも言及があり、過去を忘れることなく、日豪の和解を確かめ、将来に向けて友好を誓うといった式典の趣旨を改めて噛みしめた次第です。



そして、もう一つの機会は、海上保安庁練習船「いつくしま」のシドニーへの寄港でした。6月14日に寄港した「いつくしま」は昨年7月に就航した最新鋭の練習船で、海上保安大学生約50人が実習生として乗船していました。今回は初めての海外航海とのことで、米国、マーシャル諸島共和国を回ってシドニーに来航し、その後はインド、シンガポールを回るとのことでした。溝口船長からは、世界の海上保安機関が連携し、法による秩序維持や海の安全を確保しようとしているとの言葉を伺いましたが、自由で開かれたインド太平洋を目指す我が国の決意を伝えるのに最適な寄港だったと思います。

6月16日には、NSW州議会、連邦関係者、シドニーの外交団、日本人コミュニティの代表の方々をお招きしたレセプションを溝口船長と私の共催で行い、約100名の参加者をお迎えして、実習生有志による剣道のデモンストレーションや餅つき・書道の披露に加えて、練習船で調理された日本食も振る舞われ、盛況な会となりました。

ミンズNSW州首相の名代で出席されたチャンシヴォン州産業・貿易大臣や、フランクリンNSW州上院議長を始めとする豪州側の出席者の挨拶の中では、今回の「いつくしま」の寄港は今日の良好な日豪関係を象徴するものであり、また、両国をはじめとする関係国がインド太平洋の海上の安全を守っていくことの重要性を改めて認識させるものであるとの話がありました。

私からは、レセプションの最後に、この寄港地が旧日本海軍による「クッタバル」号の攻撃があった場所であることを思い起こせば、この「いつくしま」の寄港は、インド太平洋の海上の安全を語るのに、これ以上に相応しい場所はありませんかと申し上げた

上で、先人の方々による戦後の日豪和解の努力と、特別な戦略パートナーと呼び合う今日の緊密な両国関係を踏まえ、今回の親善訪問が日豪の更なる協力に繋がることを確信しているとご挨拶した次第です。

実習生の方々の日頃の行いの良さのたまもので、レセプションは晴天に恵まれましたが、冬の夜の甲板は少し寒く、日本酒で身体を温められた方もおられたとは思いますが、レセプションにご出席された方々には、この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

